

令和元年の終わりに (メルマガ 2019 年 12 月号)

5 月から始まった新しい時代「令和」。まもなく元年が終わろうとしています。

誰もが「平和で穏やかな時代であってほしい」と願ってのスタートでしたが、残念ながら当初から自然災害の猛威、恐怖を感じることとなりました。特に、10 月の台風では、全国各地で大水害が発生し、改めて対策の難しさを知りました。この生涯学習プラザに近い武蔵小杉や向河原周辺でも、浸水の被害に遭われ、今でもたいへんなご苦勞をされていらっしゃる方々を思うと、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

水害発生後に、京都大学名誉教授 河田恵昭先生の「日本水没」を読みました。

50 年に一度の洪水が起こったからといって、あと 50 年は起こらないと考えてはいけません。さらに大規模な洪水氾濫が、近い将来起こる確率は高くなると考えるのが専門家の常識であり、2015 年の鬼怒川豪雨災害のような水害は、どこでも起こり得ること。そのための治水計画や災害対策が極めて不十分であることなどが指摘されています。また、数々の事例から、今後の様々な被害を想定されています。

今年の各地の被害を思い返しながら、この本を水害発生の前に読んでおきたかったと思いました。多岐にわたる専門的な書ですが、興味を持たれた方はぜひご一読ください。

(「日本水没」朝日新書 2016 年 7 月)

この本でも、水害や水没の多発・激化は地球温暖化が元凶であることが述べられています。令和の時代は地球環境問題が一層大きな課題になることは間違いないと感じます。

9 月にニューヨークで開かれた「温暖化対策サミット」で、スウェーデンの 16 歳の少女、グレタ・トゥーンベリさんの訴えには真摯に耳を傾けるべきでしょう。

彼女は大人に訴えます。「あなた方は、自分の子どもたちを愛していると言いながら、その目の前で子どもたちの未来を奪っています。」「私の声は聞かなくていいので、科学者の声を聞いてほしい。」と。

私たち大人が、もっと真剣に地球環境問題に目を向けていかないと、子どもたちに明るい未来を約束することはできません。

SDGs、「持続可能」がキーワードになっていますが、私たちは「持続可能な経済」ではなく、「持続可能な地球」を希求しないと、100 年後には取り返しがつかない事態が生じているでしょう。環境は一度失われてしまえば、もとに戻すことはできないのですから。

そのために、令和の時代をいかに作り上げるか、一人ひとりの課題として、その在り方を思い描くのが、令和元年の終わりにふさわしいのではないかと思うのです。

結びに、読者の皆様にとって、令和 2 年がよい一年でありますよう、お祈りいたします。

(N.W)